

3 地域で育まれてきた音文化 その継承の危機に接して——創造は必要か？

本稿は「作曲家の視点からフィールドにおける創造について語る」というミッションを受け、鹿児島県の文化的に異なる2つのフィールド（1 鹿児島本土 2 奄美群島）の伝統の音文化の、継承調査に基づいて創作した、自作品についての基礎講座（2時間）の要点をまとめたものです。字数制限の関係で抜粋して記します。

1 日本の作曲家による

フィールドに関連した創作の先行事例

民謡を素材として用いた作曲家は少なくありませんが、自ら採集し研究した作曲家はごく少数です。まず久保けんお氏（1921～91 喜界島出身）が、その突出した民謡採集と研究業績に、民謡の作編曲が含まれることから注目に値します（詳しくは筆者が共著した『南日本の民謡を追って～久保けんおの仕事』（鹿児島大学国際島嶼教育研究センターブックレット vol.24）をご参照下さい）。次に外せないのは日本を代表する作曲家、間宮芳生氏（1929～2024）です。戦後以来、海外への留学等でアイデンティティを意識せざるを得なかった邦人作曲家たちの少なからずが、東洋 VS. 西洋という二元的な態度で、特に日本という大きな枠内で創作を行っています。しかし間宮氏は、それらの作曲家たちとは違って（より狭い「フィールド」で育まれてきた「民謡」の体感覚を有している）、そこから創造的発想による独自の作風を打ち立てました。氏の創作については深く研究、考察されるべきと考えます。

ところで筆者自身は40代になるまで、フィールドや民謡について知識はなく、興味も感じていませんでした。しかし2012年、鹿児島の精神文化の表象である薩摩琵琶を知ったことで、日本とは？ 日本の美学の源泉は？ など次々と興味が沸

き、日本を定義することは難しいけれど、「より狭い」フィールドを定め、それぞれを深く見ることで、結果として日本が浮かび上がってくるのは、との考えに至り「継承」という観点から研究を開始。これまでに鹿児島本土、奄美群島（その前に少し沖縄本島、石垣島）、高野山、近年は新潟本土、佐渡などをリサーチ、それらに関連する創作曲は多様な編成で10曲あります。

2 フィールドに関する筆者の自作品から 対比的な特徴を持つ最新の2作品

協働者は、1曲目は新潟または佐渡というフィールドを本拠地とする2つのプロ集団、2曲目はフィールドに暮らす多様な職業、年齢の市民です。

1曲目：「新潟をテーマとして」という条件で、新潟市芸術文化振興財団／Noism（舞踊団）から委嘱を受けた《舞踊と打楽器のアンサンブルのための『鬼』》（2020-22）¹⁾。佐渡に拠点を定めて40年を超えた、太鼓芸能集団「鼓童」による演奏です。新潟県の文化、政治、行政、自然環境などの有識者の方にヒアリングを重ね、多様性豊かな地域からどのような精神文化が生まれるのかに焦点を定めた末に「鬼」というテーマを導き作曲しました。

2曲目：奄美市の委嘱で奄美の文化多様性と伝統と自然が反映されている歌詞に作曲しました。奄美は世界的にも注目される歌の島ということをして2016年以降のフィールド調査を通して知り、オール奄美市民（100名以上が演奏に参加）による演奏を自治体に提案、全7バージョン（現在は全10バージョン）を半年かけて指導しました（《奄美市民歌》2020-22）。筆者は一部演奏にも参加し、CD制作の音楽監修を行いました。これも、フィールドにおける創造の一例といえます²⁾。

さて、演題の結論としては、筆者が2つのフィールドで実施した企画（2015年 薩摩琵琶：鹿児島市，2018年 島唄：喜界町）の波及効果はどちらも良好で、地元の人々の継承に対する意識に働きかけたようで、有益だったと言えます。以下に記します。

3 「鹿児島伝統の薩摩琵琶」約130年ぶりの新曲の創作とその波及効果

継承危機の原因は、薩摩琵琶が武士の精神修養の道具であり「音楽に非ず、芸能に非ず」という思想に関連しています。武家社会が終わって既に150年以上が経ち、今の生活、価値観との乖離が否めず、次世代を担う若者たちの興味を引く要素が希薄なことや、2015年に筆者が作曲するまで約130年もの間、新曲が1曲も作られていないということも原因のひとつではとの見解を、複数の継承者へのヒアリングで確認していました。また、他の日本の琵琶（「江戸流の」薩摩琵琶を含む）は、プロの演奏家を輩出、つまり芸術や芸能の高みを目指している一方で、鹿児島伝統の薩摩琵琶（昭和37年鹿児島県指定無形文化財）は「音楽に非ず…」という稀有な思想を約500年もの間、継承し続けており存在が際立っています。筆者としては日本の無形文化財の区分に、楽器＝音楽＝芸能または民俗という区分だけでなく、鹿児島本土において確かに継承されている「地域で育まれた独特の精神文化を表象した音文化で、かつ重要な歴史文化を伝えるもの」（鹿児島伝統の薩摩琵琶）を加えてほしいと考えています。

約130年ぶりの創造（新作琵琶曲）に至る経緯

①2012年1月、継承の切迫した危機を知る。②継承者、関係者、有識者へのヒアリング開始。③「新しい琵琶歌が喉から手が出るほど欲しいが、この伝統の思想を理解している人が見つからず、頼める人がいない」と継承者から聞く。④継承者へのヒアリングを「対話方式」に変更して、数ヶ月おきに継続的に行う。⑤2014年、筆者が代表のプロジェクト「伝統の身体・創造の呼吸」を立



図1 初演演奏会時のチラシ

ち上げ、鹿児島県副知事を顧問として地元財界の人々による実行委員会を結成。⑥2015年10月、勝海舟《城山》（琵琶歌）以来、約130年ぶりとなる筆者による新しい琵琶歌の《願わくは花のもとにて春死なむその如月の望月の頃 薩摩琵琶、アコーディオン、ピアノ、シンバル、舞踊のための》のパートを、継承者（上川路直光氏）と共に創作し、地元鹿児島市で世界初演。

波及効果

演奏会のチラシがリリースされると間もなく、当時20才の鹿児島大学学生が2名弟子入りを志願してきました。2022年からは市内の共研幼稚園で、薩摩武士の三修養である「自顕流」「天吹」「薩摩琵琶」の稽古を園児にも開放したところ、2023年暮れに小学生3名のほか、20代の若い世代も弟子入りし、活発に稽古が行われています。

2024年、薩摩琵琶同好会（無形文化財保持団体）は100周年記念を迎え、中堅～壮年世代の、継承への熱い思いが連携を生み、継承の活発化と安定化への努力を重ねています。

4 喜界島（奄美群島）での作曲とその波及効果 島唄に基づく新しい楽曲の創造と 初演演奏会に至る経緯

①第一のフィールド「鹿児島伝統の薩摩琵琶」は上級武家階級のみ修養。「では民衆はどんな音楽を楽しんでいたか」という疑問から、2016

年、鹿児島県の民衆の楽器「ゴッタン（木箱三味線）」を知る。②蛇皮の三線を使うフィールド（石垣島、沖縄、奄美群島の与論島）を短期調査し、言語消滅危機に連動して、島唄（蛇皮の三線を伴う「民謡」）が変わってしまう危機感と継承の危機（特に与論島は継承者が当時60代の1名しかいない状況）を知る。③2017年1月末、喜界島の調査を開始（喜界島は、まだ島唄の研究調査がされていなかったという理由）。④島唄継承者のみでなく、喜界島で起こっている音楽文化を網羅的に調査、当時の喜界島で島唄がどのように考えられているのかを多様な人々にヒアリングして把握。⑤やはり喜界島でも言語消滅危機に連動して島唄コンクールを目指す子供が多く、島唄が舞台の唄に変わってしまう危機感を確認。同時に喜界島の特徴は創造力であることを確信。「なんでも待っていたらいつになるか分からないから（離島事情で）、自分達で作る」という生活習慣があり、農業、農産物加工品、家づくりも行ってきた。音楽もオリジナル曲を作っている人が少なからずいることを知る。⑥島唄継承の未来を地元の人に問いかけ、共に考えるために、島唄に基づいた新しい楽曲の初演演奏会を提案。⑦言語消滅危機の観点から、演奏会直前までの4時間半、ネットで喜界島の文化人、鹿児島大学教授他との対談を生配信。

筆者の創作上のアプローチ

喜界島では「島唄は先祖から預かった宝」と言います。奄美群島の各島は、2009年にユネスコにより消滅危機言語指定を受けた、独自の言語を有していますが、言語を表記する文字を持っていません。つまり、生活のほぼ全てのことは永らく口承伝承であり、島唄の歌詞に、先祖の生活の知恵、人間関係、情などが唄われていて、文字のない教科書の役目を果たしていました。音楽的な特徴としては、世界的にも珍しい裏声や、節回し（島唄独特のこぶし。喉を瞬間的に転がして独自の音色を奏でる）と呼ばれる独特の響きが、三線の左手の薬指や小指と連動する技術や、言語音声

の特徴と結実し、独自の響きを実現する技術を確認していることは注目し値します（楽譜は全く使わず、メソッドもなく耳で判断して定着した様子）。

筆者の興味は、現在の80代半ばより若い世代が、喜界語はネイティブとして話せずに島唄を唄い継いでいく現状において、島唄がどう変化していくかです（筆者の印象では、暗記した言葉で歌うことになるので少なからず空っぽになり、それを補うための「技術」や「外付けの表現力」を駆使することになります。これに拍車をかけるのは、継承の衰退に歯止めをかけようとして1970年代にお隣の奄美大島で始まった島唄のコンクールです。喜界からも多数応募して、上位入賞者や優勝者も出ました。しかしコンクールがなければ島唄はほぼ減んでいた可能性がありますので、筆者はコンクールを否定はしません。問題があるとすればコンクールの審査基準ではないでしょうか。つまり選ぶ側です）。コンクールを目指す、喜界語を話せない世代にとって島唄は「舞台の唄」化しつつあります。「こういった現状について、また島唄継承の未来について、地元の皆さんはどう考えますか？」という問いかけのための創作を2曲、考えました。

2018年6月、もう50年以上唄われなくなってしまった島唄で、若い時に唄っていたという、当時70代後半で喜界語がネイティブの唄者さん（唄の名人をウタ〈唄〉シャ、声がいいのみの人をクイ〈声〉シャという）に、蘇演をお願いしました。筆者作曲の1曲目は、その蘇演の「前座」として、唄の世界観を筆者の全く自由な発想で《朝潮満ちや上りに捧げる音楽》として作曲。筆者の曲の直後に伝統の島唄「朝潮満ちや上り」を蘇演して頂きました。

2曲目は、「舞台で唄う訓練をした」30代半ばの若手唄者さんに喜界島の伝統の島唄《むちゃ加那節》を唄って頂く前に、筆者がその島唄の世界観を自由な解釈で作曲した《むちゃ加那節に捧げる音楽 ピアノと島唄のための》で、唄のパートのみで共演して頂きました。島唄の旋律は全く変



図2 《むちゃ加那節に捧げる音楽》(2018)の舞台写真

えずに、三線の代わりに、全く異なる音楽のピアノパートが奏でられるという楽曲です。その直後に《むちゃ加那節》を本来の形で（三線と共に）唄っていただきました。こうして、伝統の島唄を初めて聴く人にも、慣れている人にも新鮮な体験として、島唄の魅力を直感的に再発見、再確認してもらおうというアイデアです。また筆者の音楽は多分に抽象的なので、そこにコンテンポラリーダンスを付加して、生の身体という視覚要素を加えての初演を行いました。

以下のURLで、喜界島のミュージシャンの方々による島唄に基づいた、創意に溢れた楽曲が視聴できます。

[https://www.youtube.com/@ 伝統の身体創造の呼吸](https://www.youtube.com/@伝統の身体創造の呼吸)

この初演演奏会では、非常によくある、旋律にポップス風コード付けをするだけのアレンジは皆無でした。

波及効果

蘇演された島唄が、その直後から幾つかの集落で復活したことが収穫でした。またこの初演演奏会を地元の人々と実現したことで、人間関係が継続しながら、島唄継承の未来についての対話が今日まで続いていることは重要です。字数の関係で奄美大島について述べる事ができませんでしたが1点だけ。この演奏会の実行委員をお願いした、あまみエフエムの麓憲吾代表（奄美市）は、この演奏会の企画から刺激を受けたそうで、「奄美大島も本気をださねば！」ということで、半年後に「唄島ふえすていばるっち」という奄美大島

全域の自治体の協力を得た大型プロジェクトを開催。学校現場に唄者が訪問して、子供たちに島唄の素晴らしさを伝えるなど、次世代の継承者を意識した取り組みが行われています。

5 むすびに

フィールド＝地域で育まれてきた音文化は、その地域の精神文化の表象であると筆者は考えています。鹿児島本土では、今日の日本では稀有な存在である伝統の薩摩琵琶を継承していくための取り組みが活性化しています。芸事に一線を引き、自らを観ずる精神をどのように次世代に伝えて行けるのか。同県奄美群島の喜界島、奄美大島では、人々が地域の個性に根差した充実した日常を探求しています。その大切なひとつが音楽だそうです。地場産の音楽＝先祖から預かった宝（島唄）を次世代にどう渡して行くのか、消えゆく言語の変わりゆく唄の行く末に筆者は注目しています。

人々がどのような基準で継承について決めていくのか。また日常の大小の事柄がどのように決められ、その根拠は何なのか。そこにその地域の精神文化が見え隠れしています。日本のフィールドの多様性を、フィールドで育まれてきた音文化を通して深く見ていくことで、その地域の精神文化に触れることとなります。そして、その文化をリスペクトする気持ちが生まれて、それを筆者のようなフィールド外の人間だけではなく、何よりも地元の人々が実感することが、長い目で見て、人材のUターンや、地域の活性化につながっていくことを期待しています。そのためのプロジェクトに「創造」が役に立つのなら本望です。

1) Noism × 鼓童『鬼』

<https://www.youtube.com/watch?v=8Htx9GYMYA>

2) 《奄美市民歌》2020-22

<https://www.youtube.com/watch?v=nIzdr7nBbsk>（アンサンブル版）

（原田敬子）